



第7回 鴻文会 総会



第 25 号

発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科

人文学部 同窓会

山口大学人文学部内

電話 (083) 933 - 5200

(連絡事務所)

山口市平井773 - 2

沖田ビル202

電話・FAX (083) 928 - 4527

郵便振替口座 01500 - 4 - 15902

http://

homepage3.nifty.com/koubun/

メール: koubunkai@nifty.com

# ご挨拶

鴻文会名誉会長 田中誠 二

会員の皆様には、ご清祥のことと存じます。私ごと、今年四月より、はからずも人文学部部長を仰せつかり、此度また鴻文会名誉会長の職をお引き受けすることとなりました。困惑しておりますが、赴任以来二十九年目に当たりますので、本学のために微力をつくしたいと、あらためて思う次第であります。

さて山口大学は、他の国立大学と同様、昨年度から国立大学法人山口大学となりまして、取り巻く環境がかなり変わりました。「経営」、「効率化」、「評価」、「説明責任」といった言葉が飛び交い、人員削減、予算削減等「改革」への対応に追われております。「改革」への対応に追われるなかで、これに流されてばかりいるわけにはいきません。自己認識を深化し、主体性を保持しなければなりません。人文学部の自己認識を問われれば、文系基礎学を担当し、哲学・歴史学・社会学・文学・言語学の五分野を有し、人間とその文化を探究する学部である、と答えたいと思います。一教員としての私の自己認識を問われれば、「生涯一研究者」というのが私の志であり、自分の主体と責任に於て学問を進めていく、そしてその学力でもって教育にあたりたい、と答えたいと思います。教育は、ともに学ぶことであり、厳しいと同時に、「また、楽しからずや」でなければなりません。

かつて、就職活動をしている学生に相談を受けたことがあります。ある社の人面接の時、「経済とかならわかるけど、なぜ人文学部から我が社へ受けきたのかね」と問われ、答えに窮したのだが、どう答えたらよいのでしょうか。その時の「私だったらこう答えます」は、つぎの通りです。私は共通教育で、哲学・歴史学・文学を学び、「私は何者なのか、私はどこに行こうとしているのか」を考えました。専門では歴史学を学び、史料を読解する力を養い、情報を得てくる経路を学び、本質を極め、本質と本質の連関把握の仕方を学び、それらを組み上げていく創造力を学びました。御社がもし簿記が必要といわれれば、半年でなんとかする自信があります。しかし御社が必要とされるのは、そういう人材なのでしょうか。それとも、自分で考え、自分で組み立てることのできる人材なのでしょうか。

八月二十日に、第七回鴻文会総会が開かれ、挨拶のなかで、「我が学部は、文学部であり、皆様には懐かしい同じにおいを感じる」と申しあげました。ある卒業生の方が、「自分を支えてきたものが何であったかを改めてかみしめることが出来たいい会だった」と洩らされました。卒業生の皆様、これからも人文学部の行手を見守り、声援を送って下さいませよう、お願い申し上げます。

(歴史文化講座・教授)

# 会長挨拶

鴻文会会長 大野光生

会員の皆さんこんにちは。会報発行に際し、ご挨拶申し上げます。有馬前会長の後を引き受けて間もなく五年目を迎えようとしております。その時の定例総会以来、早くも四年という歳月が経ったことになりました。四年に一度の第七回鴻文会総会を今年八月二十日に開催すべくご案内申し上げます。したところ、加藤紘学長はじめ、旧職員、鴻南会(旧制山口高校同窓会)からも加わっていたいただき、多くの参加者をお迎えし、盛會裡に終えることが出来ました。本当にありがとうございました。私にとつては、会長として二度目の総会でしたし、今回で会長という重責から解放されることを念願していましたが、バトンタッチすることができず、引き続き会長としてお世話することとなりました。どうか、よろしくご支援のほどお願い申し上げます。

四年前、つまり前回の総会は、たまたま五年に一度の周期で開催される鴻理会の総会と同時開催となり、たいへん有意義な総会となりました。かつての文学学部時代のなつかしい面々との再会が果たせたいわゆる昔風の同窓会という一面がありました。あえて昔風と申し上げるのも、近時、いろいろな事情によって、同窓会の在り方に变化が生じ、大学そのものが国立大学としての存在から、独立法人化された新しい大学へと変貌したことで、母校の伝統と新し

い大学像を目指す上で、各学部の同窓会が一丸となって支えることが求められ、山口大学同窓会連合会なる組織を立ちあげることになったのは、ご案内の通りであります。会の組織を、一枚の布に譬えらるるとしますと、縦横の縦系、横系の組み合わせり方がより複雑となった感じになりました。それもこれも時代の变化の反映だといえるでしょう。

官から民へという呼び声通り、国立大学がなくなり、それぞれ独立法人化されたことで、大学自体の在り方にもおおきな変化のうねりが押し寄せたとはいえますが、私達の母校であります人文学部の存在価値が改めて問われることとなりました。「物」から「物」へ主体があくまで「物」に置かれる理工科系の存在に対して、人文学部の存在は「物」から「心」へと、いわば精神文化昂揚の担い手を育成する貴重な存在であることが一層期待されることでもあります。

ところで、前回の総会は鴻理会との共催というところで、講演は理学部出身で、現在土井ヶ浜人類学ミュージアムの館長をなさっておられる松下孝幸氏にご講演をお願いしました。今回は、今号の紙面で紹介させていただきますように、文学学部出身五期、昭和三十一年、中国文学科卒業後、九州大学、大学院博士課程を修了、同大学教授から神戸女子大学名誉教授となられた林田慎之助氏の

お話を聴く機会に恵まれました。題して「寛政の異学の禁と一人の儒侠」は、臨場感あふれる語り口で、参加者の心身に滋養を施すに十分な深みと味わいがありました。この項をお借りして感謝と敬意を表するものであります。ありがとうございました。

さて、ここで同窓会の組織上の問題として、近時、個人保護法なるものが生じ、名簿作成もままならぬこととなりました。これも時代の变化の姿の現れなのでしょうが、すでに、各科の同期会などの案内に必

## 第七回鴻文会総会・懇親会報告

前副会長 添田 建治郎

第七回の鴻文会総会・懇親会は、平成十七年の八月二十日(土)の夏のよく晴れ上がった昼下がりに、山口大学学生会館を会場にして開催されました。あれから四年ぶりの再会である。

各地から四十名を超える同窓生が集い、来賓として、旧制山高の鴻南会、鴻理会、鳳陽会、常盤工業会、霜仁会の代表もお迎えし、「盛大」に始まりました。

総会行事の開催が十二時三十分、会場は山口大学学生会館の会議室である。立川和正委員の開会の辞を皮切りに、大野光生会長が立たれて会長挨拶。山口大学に学んだこと、同窓会のあることの意味を熱く説かれた。会長の来賓の方々の紹介に続いて、田中誠一人文学部長より、平素の鴻文会の

要な時は、同窓会事務局に保管されております名簿から抜き出し、要請があれば、会長の許可を経て、送ることが可能ですから、事務局を存分に利用なさって頂くようお願いいたします。各学科の同窓会の発展が人文学部同窓会の発展につながるものでもあります。どうか、今迄通りの意識で会がより積極的に維持されますよう重ねてお願い申し上げます。

(文理第四回卒・中国哲学)

同窓会活動への敬意と感謝、山口大学・人文学部の現況を含むご挨拶を賜った。鴻文会の空気には、学問領域・志を共有する者としての「同じ匂いがする」と形容なさったのが印象的であった。

その後、権代鉄也委員を議長に選出して議事に入った。添田が、会報発行・連絡事務所・HPなどの近況報告を含む四年間の事業報告を行い、十七年度の事業計画案の説明を行った後、十六年度の決算案、十七年度の予算案を提案。北川健監事の十六年度会計の監査報告が行われた後、質疑にかけられ以上をすべて承認。続いて、議事は「役員改選」に移り、添田より、「大野光生会長、立川和正副会長、本田義昭副会長」を執行部とする新役員案の提案が行われ、

後掲のように決定した。最後に、再選された大野光生氏が今後四年間の同窓会運営の決意を表明して総会行事を終了。

十四時から、同じ会議室において公開記念講演会が開催された。講師は昭和三十一年度中国文学卒の林田慎之助氏(神戸女子大学名誉教授)である。講演に先立って大野会長が講師を紹介。講演は、「寛政異学の禁と二人の儒侠 亀井南冥と亀田鵬斎」と題して、江戸時代後期の「寛政異学の禁」に抗して芸術の道を踏み外さず歩いた二人の香り高い儒者の存在・生涯を紹介。教えられるところの多い内容豊かな講演であった(講演概要は本会報に掲載)。大学会館の玄関前での記念撮影には、所用がおありだった加藤紘字長も駆けつけられた。

いよいよ「メインイベント」の懇親会。会場は学内食堂の「きらら」である。司会は藤井英樹氏。これは何と云っても氏のはまり役。乾林の音頭は副会長の立川氏。軽妙な中にも含蓄のある挨拶に会場が幾度も笑いに包まれました。これより祝宴に入り、加藤学長は小振りな同窓会鴻文会への激励と期待を述べられ、先輩同窓会、兄弟同窓会からは鴻文会に対する温かいエールを送っていたいただきました。満を持して登壇の関一雄先生のご挨拶は一段と磨きのかかった洒落尽くし。歓談の時間を交えながら、東アジア研究科長の重責を担う小谷典子、前人文学部長田中賢、両先生の薫り高いお話をいただき、一時間はあっという間に過ぎていく。残った料理の何と多かったことか。

顧問の大塚博先生が、閉会の辞・乾林の音頭でしめてくださり万々歳。今年は若い方々の顔が三分の一を占め、次世代へのパトナツツちに明るい見通しが立ちました。別れがたい思いを抱きつつ、そして、「学問の府、人智の里としての人文学部の厳存」(立川和正氏の言)を祈りつつそれぞれの家路を急いだ。

今回の総会・懇親会の開催につきましては、受付に準備にとりろいろお手伝いくださった学内幹事・職員、そして、新旧役員、連絡事務所の小野さん、皆さんどうもいろいろありがとうございました。この紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。

(文理第十七回卒・国文学)

## 公開講演会講演要旨

# 寛政異学の禁と二人の儒侠

亀井南冥と亀田鵬斎

林 田 慎之助

この夏八月二十日に、「寛政異学の禁と二人の儒侠」という演題で、山口大学人文学部同窓会の席上で話したことを、会報にまとめるようにという要請である。

当初、地元長府出身の俳人菊舎尼が、

長崎に遊んださいの清人たちとの文雅なる交流について話そうと思ったり、これまでわたしが知りあつた作家や文芸評論家たちの風貌容姿について語ってみようと思つたりしたが、つまるところ、先の演題に落着いた。

二人の儒侠とは、寛政異学の禁に抵抗した亀井南冥と亀田鵬斎である。

儒侠とは、一般にはわかりにくい言葉であるが、侠骨の香り高い儒者を指して言う。当面する社会の不公平だとか、人間の不平等について怒ることのできる「義」の心を持った儒者といいかえてもよい。そういう生き方を貫いた二人の儒者について、その漢詩をとおして考えてみようというのが、今回の講演の内容であった。

寛政異学の禁は、松平定信の寛政改革の一策といわれているが、それだけに実情はもつとふかいところに要因があつた。享保の田沼意次時代から、放漫な貨幣経済の発達にともない、上下利に走り、

奢侈に流れる風習が生じた。そこで定信は改めて幕藩体制のイデオロギーである朱子学の修身主義、謹直主義を徹底させて、人心の引き締めをはかったのである。結果として、朱子学以外の学問を異端の学として否定し、今後、朱子学を修める者でなければ立身の道が立ちゆかないようにした。

それでも、亀井南冥は古文辞学の思想を捨てることはなかつたし、鵬斎、山本北山、冢田大峰など五人の学者は、学問の自由を主張して屈せず、江戸の五鬼と称せられた。

外様大名である黒田藩は、定信の禁令に敏感に反応した。その時期、この藩は珍しいことに二つの藩校を開設していた。朱子学の修猷館は温存し、南冥の甘常館を廃校に追い込む前に、教授兼侍医の南冥に塾居謹慎を命じた。

異学の禁は、私塾にも大きな影響をおたえた。江戸の鵬斎の私塾で学んでいた旗本の子弟はことごとく朱子学に転じて、鵬斎のもとを離れていった。

これで鵬斎の生活もしだいに窮迫するようになってきた。それをみかねた師の井上金峨は、たまたま尾張侯が賓師を求めていると知って、鵬斎にすすめて、自分の弟子ではなく、上杉米沢藩の儒者で藩政改革をなしたげた細井平洲の門人となして、その招聘に応じさせようとした。

これにたいして鵬斎は、「人の出自は大切である。先生に受けた恩義は重い。今学ぶ師にそむくが如きは、士のなすべき行為ではない」と、謝辞したという。鵬斎の硬骨漢振りを知る逸話である。

寛政異学の禁で廃黜された亀井南冥とともに、亀田鵬斎も異学の禁に屈することになった儒者というべき存在であった。南冥が豪快な愛酒家であったように、鵬斎も酒徒として天真爛漫、物ごとに拘泥することはなかった。南冥は酒に鬱屈するところがあつたが、鵬斎の酒は開放的で陽気に楽しむところがあつた。この酒徒としての違いが、二人の生き方を決定した。

蟄居以後の南冥は、鬱々として慰まず、ついに自宅に火をかけて焼死する。南冥は不幸な死をとげたが、その学統のなかから、広瀬淡窓、原古処、村上仏山、恒遠醒窓などの儒者漢詩人が輩出し、南冥の子の昭陽、昭陽の子の暘州から高場乱、高場乱から頭山満、頭山満から広田弘毅、中野正剛、緒方竹虎といった日本の近代史を担う政治家が出てくる。

頭山満は孫文の大アジア主義に共鳴して玄洋社を設立、その思想的影響下にあつた広田弘毅は総理大臣となるが、戦後A級戦犯として一言の弁明もせず、断頭台の露と消えた。中野正剛は、第二次世界大戦の首相東条英機を猛烈に批判して、割腹自殺に追い込まれている。

亀井南冥は黒田藩にたいして積極的な海防策を説き、財政改革、人材登用策を唱えたが、いずれも納れられずに終わった。南冥が学んだ古文辞学は萩生徂徠に始まるが、実学を重んじた。生きた学問、現実と積極的にかかわる学問であつた。その南冥の学統から沢山の人材が出てきたことは、死後とはいえ南冥にとって幸せなことであつた。

いっぽう亀田鵬斎が井上金峨から学んだ折衷学派は、朱子だとか、程子だとか、それ陽明だとか、学問の権威を外においてとられず、人間ののつとるべき規範は、自分の内にある外になく、自己の信ずるところにしたがって、中国の思想を受容する学問であつた。鵬斎も折衷学派にふさわしく、自分の内的な世界を大事にして、外なる権威に屈することのない個性人であつた。豪放磊落にして、ふるえるようなデリケートな心臓の持主であつた。

彼が異学の禁に暮した墨東の地、墨田川の東岸は、川を一つ距てた界限だが、そこには江戸の中心とは違つて、自由な別天地の空気がみなぎつていた。



そこに集つてきた画家文人、風流人のなかで、鵬斎は中心的な存在であつた。谷文晁、酒井抱一などの画家がいて、大窪詩仏、大田南畝、山本北山などの文人が遊び、交流する場があつて、鵬斎は貧しくとも、詩に、書に自分の才能を存分に発揮することができた。異学の禁に対する憤りを内に秘めながら、屈託なく芸術の花園に身をおいて、閉じた芸術的生活であつた。

首だけ披露して、この稿を終ることにしよう。

青山  
朝歩青山裏 朝に青山の裏に歩み  
暮臥青山間 暮に青山の間に臥す  
染着青山草 青山の草に染着して  
渾身己青山 渾身己に青山なり

(文理第五回卒・中国文学)

### 鴻文会新役員名簿

- |      |                  |                  |
|------|------------------|------------------|
| 会長   | 大野 光生 (S 31・中哲)  | 山縣 乙水 (S 37・中文)  |
| 副会長  | 立川 和正 (S 35・西哲)  | 権代 鉄也 (S 41・英米)  |
| 名誉会長 | 田中 誠二 (人文学部長)    | 池田 容子 (H 9・英語英文) |
| 顧問   | 和田 敏英 (S 28・英米)  | 田村小百合 (H 6・独語独文) |
|      | 大塚 博久 (S 31・中哲)  | 瀨川 幸男 (H 6・仏語仏文) |
|      | 有馬 正人 (S 31・西洋史) | 前田雅恵利 (H 13・言情)  |
| 委員   | 原口 公康 (S 63・思想史) | 監事               |
|      | 武居スミヨ (S 43・国史)  | 北川 健 (S 35・国史)   |
|      | 柳場 義治 (S 36・東洋史) | 藤井 英樹 (S 31・社会)  |
|      | 渡邊 早苗 (S 59・西洋史) | 幹事               |
|      | 宮藤 隆夫 (S 42・社会)  | 岡光 一浩 (S 41・独文)  |
|      | 大谷 泰子 (H 13・社情)  | 田中 晋 (S 41・英米)   |
|      | 目 理恵 (H 9・博物)    | 添田建治郎 (S 44・国文)  |
|      | 青島 啓 (H 10・博物)   | 根ヶ山 徹            |
|      | 酒井 良夫 (S 44・国文)  | (S 60・中国語学・中国文学) |
|      | 小野 美典            | 磯部 佳宏            |
|      | (H元・人文科学研究科)     | (S 62・人文科学研究科)   |
|      |                  | 村田 裕一 (H 3・考古)   |
|      |                  | 村岡 睦子 (H 6・社会)   |

# 社会人五年生

## 「2005年、夏の出会い」

宗 雪 こそえ

多くの人との出会いがあったこの夏、私はたくさん経験をさせてもらいました。

5年前、私は山口大学人文学部を卒業しました。卒業後は地元大学の聴講生になって、英語学の勉強を続けようと思っていました。卒業する数週間前、急に地元の中学校での講師のお話があり、4月から講師として、母校で英語を教えることになりました。40人クラスを3クラス担当し、教え方に迷って不安を感じたり、初めて運動部のクラブをまかされて戸惑ったりしながら、一学期はまたたく間に過ぎていきました。半年後、家から6km西にある中学校に転任（私は運転免許を持っていないので、ずっと自転車通勤）。幸いにも、教員採用試験に合格し、翌春、赴任先は今度は家から6km東にある中学校。早速初任者研修を受けました。初任者研修では、教授法や生徒指導など、まさに私が講師のときに悩んだり、不安に思っていたりしたことを教わり、この研修をもう1年早く受けていればよかったなあと思ったことを覚えています。

3年目からは、愛媛県民でも知らないくらい瀬戸内海の小島、生名島（時折地図にも記されないほどの周囲10キロ）

# 長門 峡

吉 兼 才 三

清く碧き水は繪とまがふ  
岩陰深き長門峡の流れは速く  
大石の間をくねり砕き  
その破音は寂寥に響けり

木の葉の舞ひて水面に散り  
彼方に消えゆく諧調は何者ぞ  
無の世界と呼べるゝか  
梵の世界と言はるゝか

川巾の愈々狭きを飛び交ひて  
足を流れに下ろし大石に座す  
旅の愁ひに身を置けば  
夢うつつに時の過ぐるを識らず

仰ぎ見れば数羽の鴉影  
谷を横切り渡る景色あり

(文理第三回卒・社会学)

にある全校生徒44人の小さな中学校に赴任しました。人口は2000人ほど、住民皆が知り合いといった感じの、気候も人情もとても温かい雰囲気の良い島です。英語と美術の担当になりました。全校生徒が少ないので皆が主役、生徒全員で準備にあたらないうと行事一つ進みません。もちろん教員の数もわずか10人の小世帯、校務分掌をかねもちしながら充実した日々を送っています。

今年の春、思い切って、イギリスのロンドンにあるUniversity College Londonに留学をする研修に申し込むことにしました。2週間というまとまった時間は、生名島にいる間にしか取れないと考えたからです。山口大学を卒業してから5年、座って勉強をすることなど久しくやっていなかったため、滞在中はずっとアドレナリンが分泌されっぱなしといった感じでした。ロンドンでは、現地の先生からシェークスピアについてなど学ぶことができ、5年前に山口大学で学んでいたことや学生生活の楽しかったことなどが思い出されました。国会議事堂、博物館、グループ座など現地実習にも行くことができ、まさに百聞は一見にしかずといった言葉がぴったりな貴重な経験でした。ロンドンではまた、現地の先生だけではなく、あらゆる国から留学に来ていた人たちとも知り合え、仲良くなりました。普段は学校と家とを往復するだけの生活なので、徐々に友達が増える楽しさも味わいました。

コースの同窓会に参加いたしました。鴻文会総会にも顔を出し、研究室の同窓会はその日の夕方でした。5年ぶりに恩師や友だちに会うことができ、楽しい、なつかしいアツという間の2時間でした。次の同窓会が開かれる4年後まで、もっと勉強をして人との出会いを大切にしたい、もう少し成長していればいいなあ……。

(人文第十九回卒・英米語文化論)

## 鴻文会 会員名簿利用規則

一、会員名簿の更新（新規入会・異動に伴う）と保管は事務局で行う。

二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。

三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。

四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるが、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。

五、会員名簿の開示申請者名簿（利用者名簿）を作成し事務局で保管する。

## 平成16年度事業報告

1. 山口大学同窓会連合会(8月9日)
2. 山口大学日中学术交流奨励会理事会及び総会(7月14日)
3. 第31回役員会(7月10日)
4. 会報「鴻文」第24号発行(3月)
5. その他

## 平成16年度決算

収入総額 2,731,787 円 支出総額 2,145,346 円 残高(次年度繰越金) 586,441円

## &lt;収入の部&gt;

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	429,867	429,867	0	
会費収入	1,970,000	1,950,000	20,000	10,000円×195人(16年度入学者)
名簿収入	0	0	0	
繰入金	0	221,890	221,890	賛助金(H.16年4/1~H.17年3/31)
雑収入	130,000	130,030	30	教育研究後援財団家賃130,000円、預金利子
合 計	2,529,867	2,731,787	201,920	

## &lt;支出の部&gt;

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	31,739	68,261	役員会、交通費、その他
印刷費	280,000	208,382	71,618	会報印刷4,700部、封筒印刷5,000枚
郵送料	510,000	372,030	137,970	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事務所運営費	800,000	795,350	4,650	家賃390,000円、人件費・アルバイト料365,350円 事務所経費40,000円(電話、町内会費、その他)
ホームページ維持費	70,000	0	70,000	プロバイダ契約料、メールウィルスチェック料、謝礼その他
事務費	20,000	22,030	2,030	消耗品、その他
寄付金費	250,000	340,000	90,000	日中学术交流奨励会、教育研究後援財団、東アジア
慶弔費	40,000	40,000	0	鳳陽会、霜仁会、常盤工業会総会への祝金
積立金	300,000	300,000	0	特別会計へ繰入
総会費	0	0	0	
予備費	159,867	35,815	124,052	懇親会補助、その他
合 計	2,529,867	2,145,346	384,521	

## &lt;特別会計&gt;

科 目	15年度財産	16年度財産	比較増減	摘 要
中期国債ファンド	1,411,770	1,411,777	7	
定額預金	3,009,000	3,009,000	0	H.12~H.15年度一般会計より繰入
定額預金	671,000	671,000	0	H.13、H.14年度賛助金より繰入
定額預金	0	300,000	300,000	H.16年度一般会計より繰入
合 計	5,091,770	5,391,777	300,007	

平成17年5月31日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 藤 井 英 樹  
北 川 健

## 平成17年度事業計画

1. 第32回役員会(6月4日)
2. 山口大学日中学术交流奨励会理事会及び総会(7月6日)
3. 山口大学同窓会連合会(7月15日)
4. 鴻文会総会(8月20日)
5. 会報「鴻文」第25号発行(1月15日)
6. その他

## 平成17年度予算

## &lt;収入の部&gt;

科 目	17年度予算額	16年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	586,441	429,867	156,574	
会費収入	2,040,000	1,970,000	70,000	学生部199人、院生2人、編入生3人
繰入金	0	0	0	
賛助金	200,000	0	200,000	H.17年4/1~H.18年3/31
雑収入	0	130,000	130,000	教育研究後援財団家賃
合 計	2,826,441	2,529,867	296,574	

## &lt;支出の部&gt;

科 目	17年度予算額	16年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	100,000	0	役員会、交通費、その他
印刷費	230,000	280,000	50,000	会報印刷(5,000部)、封筒印刷(5,000枚)
郵送費	400,000	510,000	110,000	葉書購入、会報郵送費、通信連絡費
事務所運営費	820,000	800,000	20,000	家賃、人件費、事務所経費(電話、電気、町内会費)
ホームページ維持費	140,000	70,000	70,000	プロバイダ契約料、メールウイルスチェック料、謝礼ほか
事務費	20,000	20,000	0	消耗品、その他
寄付金費	250,000	250,000	0	日中学术交流奨励金、教育研究後援財団
慶弔費	50,000	40,000	10,000	各同窓会への祝い金
積立金	0	300,000	300,000	
総会費	700,000	0	700,000	
予備費	116,441	159,867	43,426	
合 計	2,826,441	2,529,867	296,574	

## &lt;特別会計&gt;

科 目	17年度財産	16年度財産	比較増減	摘 要
中期国債ファンド	1,411,777	1,411,770	0	
定額預金	3,009,000	3,009,000	0	H.12~H.15年一般会計より繰入
定額預金	671,000	671,000	0	H.13、H.14年度賛助金より繰入
定額預金	300,000	300,000	0	H.16年度一般会計より繰入
合 計	5,391,777	5,391,777	0	

## (続)中世山口の文芸の跡

## 長門国船木の「吉祥院」

小野 美典

室町時代、十一年間も続いた応仁・文明の乱(一四六七—一四七七)は、京都の街を荒廃させてしまった。そして、多くの文化人達は地方の有力者を頼って下向することとなる。その地の一つが、大内氏の支配下、当時最も栄えていた山口であった。

山口を訪れた文人の中で最も著名な人物は、連歌師宗祇であろう。宗祇は、文明十二年(一四八〇)と延徳元年(一四八九)の二回にわたって山口を訪れている。特に有名なのは、最初の訪問。五月に大内政弘の招きで来山し、翌年の初夏まで滞在している。この時、築山館(現在の八坂神社辺り)で詠んだ句が「池は海梢は夏の深山かな」である。築山館は政弘の父教弘の築いた別邸で、林泉の美を誇っていたという。政弘自慢の館で、「所の様を詠め」と言われて詠んだのがこの句。池を海に見立て、雄大でしかも時宜になつた句に、政弘もさぞやご満悦であつたらうと思われる。

さてこの後、宗祇は九月六日から十月十二日にかけて、北部九州への旅に出る。「筑紫道記」の旅である。この紀行文の中で、宗祇は自らの若年期に関する重要な発言をしている。

いったい、宗祇の出自・青年期の詳細は不明である。宗祇が歴史上に足跡を残し始めるのは三十代後半になってからであり、それまでの閨歴は杳として知られていない。ただ、この「筑紫道記」の旅の中、宇部市(旧楠町)船木での二晩の逗留の記事が、宗祇の青年期を自ら語ったものとして、古来やかましく論じられて来たのである。

あるは山深く水流れ、あるは引板ひき鳴らす賤の山田に雁のうち鳴きなきとする所々を過ぎて、船木といふ所に、昔、都相国寺にして折々頼み侍る人、この山里を占めて吉祥院とてあり。今両夜の契り、万年の昔の語らひにも劣らず、様々のことごとく、狭き袖には包みがたくなん。「筑紫

道記』本文」

旧暦九月六日の夜明け方に山口を立出た一行は、左手に楳野の川を見ながら津の市(小郡)に出る。現在の国道9号線に沿った道であろう。小郡で雨にたたられるが、雨宿りの後出発して、今度は2号線沿いに下つて行つたと思われる。周防・長門の境に木綿を掛けた大きな石を見て、山中(地名)で休憩。現在2号線沿いに割木松のバス停があり、防長国境の看板がある。宗祇が見たという石は確認できない。割木松・山中・車地の辺りは、2号線の中でも最も寂しい山道。現在でも民家が数軒点在するのが見える程度である。ここを約五百年前に宗祇が通つたと思つくと、室町時代に逆戻りしたのではないかと錯覚してしまう。今でも鄙びた山道である。それが宗祇の手にかかると、前述の引用部分のように、興行きのある寒村の風景に、水の音・引板の音・雁の声といった伝統的な歌の世界の景物が音声を伴って加わり、物悲しい晩秋の寂寥感を醸し出す。そして山越えの後、旅の最初の宿泊地は、船木の吉祥院なのである。

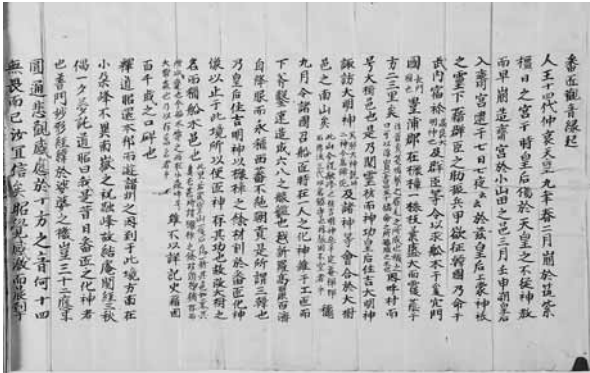
さて、その吉祥院には、宗祇がかつて京都の相国寺で知遇を得ていた人物(恐らくは禅僧か)がいたこと以外何もわからない。旅の初日から二晩も逗留したというのも、意味深である。宗祇研究の泰斗金子金治郎氏は、相国寺が遣明助合貿易に深く関与したことや大内氏の貿易関係、また、宗祇の

自撰句集『老葉(初編本)』に「吉祥院渡唐」なる言葉があることなどから、吉祥院なる人物を遣明貿易に関わつた人物と想定し、宗祇をもそうした政治・経済的方面からとらえようとする。その可否はさておいて、謎に包まれた宗祇の閨歴を解明するカギが、船木にあるというのが興味深いことではなからうか。

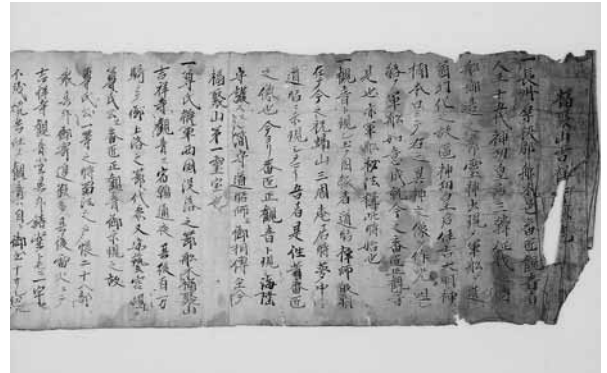
この吉祥院なる寺に関しては、『筑紫道記』の注釈書はその詳細を記さない。金子氏は、「縁起は現に瑞松庵にある。(山本静男氏による)」と伝聞の形で記すものの、その縁起の内容には言及しなかつた。金子氏の注釈が出版された当時(昭和51年)、縁起は瑞松庵にはなく、興福寺にあつたため、それ以上の追求が出来なかつたのではないかと思われるのである。この吉祥院の縁起は、その本尊である番匠観音とともに数奇な運命のもと各地を点々とし、平成16年によくやく瑞松庵(船木大野に在る曹洞宗の古刹)に落ち着いたのである。縁起の紹介と翻刻は、『語文』百二十三号(日本大学国文学会・平成17年12月)に掲載したので、書誌並びに原本の詳細はそれを御覧いただきたい。ここでは、少しくその内容を紹介してみたい。

縁起は全部で三種類ある。A『福聚山吉祥寺縁起』・B『番匠観音縁起』・C『観世音略縁起』。これら縁起の書写年代は江戸時代後期と思われるが、縁起そのものの成立はそれより古い時代を想起さ





B 番匠観音縁起



A 福聚山吉祥寺縁起

せる記述もある。なお、Aは「吉祥寺」となっているが、寺号を「寺」で統一しようとした時期があったようで、一時期吉祥寺と呼んだ時代があったのである。内容は明らかに吉祥院のものである。ちなみにB・Cの本文中には「吉祥院」と明記されている。

B『番匠観音縁起』の内容が最も詳しいので、以下《》内に要約しつつ、その内容を紹介する。《神功皇后が朝鮮出兵をこころざした時、大樹邑(今の船木辺り)の巨大なクスノキで軍船を造ろうとした。諸国の船匠を召したが、中に化神が紛れ込んでおり、四十八艘の軍船を即座に作り上げた。皇后は帰朝後、クスノキの余材でその化神の像を作り、大樹邑を船木邑と改めた。この時に刻まれた像が、番匠観音像(平成3年楠町指定有形文化財)である。現在、瑞松庵に安置されているが、右手に蓮華の花を持つた、実に美しい観音菩薩立像である。縁起は続いて吉祥院建立の次第を述べる。《釈道昭が帰朝して諸国を行脚していた時、中国の祝融峰に似た山をこの地に見つけ、三年ほど住んでいたところ、夢に番匠観音が現れた。夢覚めてお告げの地に行くに観音像があった。村人達も崇敬して像を安置し、二百年ほど経って吉祥院と号した。》この「道昭」は、A・Cの縁起では「道昭禅師」と紹介される。恐らく、七世紀に入唐して玄奘三蔵から法相唯識を学び、日本に初めて禅をもた

らした道昭のことと思われる。実際、道昭は全国で土木・福祉事業をしたとの伝承があり(宇治橋も彼が造ったとの言い伝えがある)、それに依拠して船木に三年居たとの伝承を作り上げたのである。道昭の時代から二百年後に吉祥院と名付けたとするのは、道昭の時代とするとあまりに古すぎるからであろうか。さて、さらに縁起は道昭がその尊像を版木に刻み、守り札としたことを記す。その守り札は、船木の地名の由来や当時の観音信仰と相俟って、海難除けに靈験があったと言った。そして末尾に、寛永十二年(一六三五)に、岡崎八幡宮北の丘に吉祥院を移した旨を記して終わる。本縁起(B)は、他にも、割注の形で、瑞松庵の開祖定毒殊禅に言及したり、造船時の楠の木屑が石炭になったとの伝承を記したり(船木から宇部沖にかけては昭和三十年頃まで良質の石炭を産出した)、船木の郷土史を考える上では、興味深い内容を記している。

さて、この縁起は、番匠観音像と共に各地を点々としたようである。縁起そのものの来歴は不明だが、観音像の来歴は或る程度追跡できるので、縁起が観音像とともに在ったであろうことを前提に、明治以降の縁起(観音像)の歴史を追ってみたい。前述の寛永十二年岡崎八幡宮の北の丘に八幡宮の社坊として吉祥院が移ってきた時、もちろん縁起はそこに在った。そして明治に入って、神仏分離に

よって一特別な地に吉祥院が移転したが、そのうち寺が腐朽して、観音像などは瑞松庵に引き取られる。ところが、明治35年頃広福寺という地名の場所に広福寺を再興(正式名称は瑞松庵説教所)。この時、その本尊として瑞松庵から観音像(恐らく縁起も)が移され、のちに寺号が興福寺と改められて平成に至ったようである。興福寺最後の住職がこの観音像を守っていたが、この人はまさに世捨て人のような人で、興福寺の参拝者もほとんどいなくなつたらしい。平成に入つて

この住職も亡くなり、寺をどうするか色々と紆余曲折があつたようだが、結局、興福寺は無住、観音像は瑞松庵に移されることとなつた。実際に移されたのは、平成16年で、その時、瑞松庵現住職の藤村弘隆氏が興福寺の内陣を整理していた時、古びた経机の中からこの縁起を発見され、観音像とともに瑞松庵に引き取られたとのことである。

番匠観音は、長門三十三観音霊場の第十八番札所の本尊として江戸時代から有名である。従来、十八番札所は興福寺(広福寺)とされてきたが、宝永二年(一七〇五)に作られた十八番札所の額に記された御詠歌は、なべて世に名在る仏に詣でけり瑞の松の庵訪ねてで、「瑞松庵」が詠み込まれている。ひょっとして、瑞松庵が古くは観音霊場の十八番札所であつたのではないか。そう思うと、今現在、番匠観音像と縁起三種は、

納まるべき所に納まったと言える気もするのである。

わたくしは、前々回の『鴻文23号』（平成16年3月）に、「中世山口の文芸の跡 周防国仁平寺の「延年」と題して、仁平寺の延年を紹介する拙文を掲載させていただいた。それは、併せて故石井大先生（日本語文化論）をお偲びする念を、わたくしなりの形で書かせていただいたものであった。

そしてまた、その稿を成した同じ年の平成16年の暮れに、水本精一郎先生（日

本語文化論）も幽明境を異にされた。前年の秋に輪禍に遭われ、その後、徐々に快復されていると仄聞していただけに、突然の訃報は驚き以外の何物でもなかった。亡くなられる半年前の初夏、入院先の日赤山口病院に伺った時は、わたくしの顔を御覧になって「やあっ！」と、あの明るい笑顔で迎えて下さった。当時、先生は頭部の強打によって記憶が混濁されていたが、山口大学の教官時代のことを色々と懐かしそうに話して下さいました。

わたくしは、先生が専門とされる近代文学専攻ではなかったが、学部・大学院時

代を通して、並々ならぬお世話になった。

わたくしの拙い運転で、県内の名所・旧跡を訪れたのも、一度や二度ではなかった。先生が、雑俳を好まれると聞いたのは、だいぶ後になってからであった。宗祇が相国寺時代の友と二晩にわたって旧交を温めた吉祥院。その二人の会話を聞いたであろう番匠観音の存在を先生が御存じであったら、恐らくはわたくしの車の助手席に乗られて、宗祇の話をしなから、興福寺・瑞松庵に向かったのではないかと思うのである。

（人文科学研究科第三回・平成元年）

## 研究室 同期会 同窓会紹介

### 社会学同窓会

#### 第28回社会学同窓会 総会開催される

おたに のりこ

社会学同窓会の第28回総会は、平成十七年六月四日に山口市の防長苑で、現職

の先生三名、宇部フロンティア大学の木下謙治先生、同窓生十五名の出席で開催されました。

出席者は、一番若いところで平成十三年の卒業生でした。同窓の卒業生の世代間交流はお互い得るところが大きく、今後、若い世代のさらなる出席も期待したいものです。

今年の総会の一番大きな出来事は、会長の交代です。同窓会発足から、初代竹

田守恵会長、二代目藤井英樹会長、三代目芳西靖幸会長が同窓会の柱となっており、昭和四十二年卒業の宮藤隆夫氏が会長に就任されました。

人文学部が大講座制に移行し、社会学系研究室で学んでいた学生が「社会情報論コース」で学ぶようになって、同窓会の名称の改称などが検討された時期もありましたが、同窓会報の潮見実先生の書かれた「山大社会学同窓会報」の題字が捨てがたいということでしょうか、昨今では、同窓会の検討事項からはずれてしまいました。

今年度の総会では、横田尚俊先生が社会情報論コースの現況、大学の社会貢献

に関して公開講座について報告され、その後、会員が立ち上がり、近況報告をしなから、和氣諒々、歓談が過ぎました。

総会は、毎年六月の第一土曜日に開催されることが恒例になっています。各地の同窓会支部で開催される年もありますが、山口市での開催は、ちょうど一の坂川のホタルの飛び交う時期です。防長苑での総会后、三々五々、ホタル見物に出かけられた会員も多かったようです。

（社会情報学講座 教授）

### 英語学英米文学同窓会

田中 晋

八月二十日（土）の第七回鴻文会総会及び懇親会終了後の六時半から、集え得る者十九名相集い英語学英米文学の同窓会を催しました。ホテルニュータナ力会場に大先輩から今春卒業の若者に至るまで、大学院生、現教員を含めての楽しい一夕でした。

文理第四回卒業の齋藤玲子さんの乾杯にはじまり、つづいて各自が自己紹介をかねて近況の報告を行い、池園宏氏の軽妙な司会のもと、なごやかな雰囲気のうち二時間余を過ごしました。むつかしい世の中になりましたが、こうして同窓生が無事集えることは何にもまして有



(文理第十四回卒・英米文学)

難しいことだとしみじみ感じました。歓談のうちにあつという間に時間が過ぎ去り、権代鉄也氏(文理第十四回卒)のしめくくりの乾杯でお開きとなりましたが、名残はつきず、松田屋に場所を移しての二次会となりました。

再会を約して本当のお開きとなったのは深夜でした。

独文学同窓会

語り・歌い  
継がれる「独文」

岡 光 一 浩

平成十七年八月二十日 18:30~21:15. 湯田温泉翠山荘にて開催。

出席者は二十歳の学生から八十四歳の恩師まで二十四人。三次会のカラオケ・スナックのコースターには、「は歳の差なんか」とあつたが、かつて同じ研究室でドイツ語を教え、学んだ(学んでいる)というだけで、これだけ歳の開いた知らない者同士の集まりが、かくもこれだけ盛り上がるものか。みんな、よく飲みよく食べ、よく喋りよく歌った。予約の時間が過ぎ、延長しても、歓談はやまず、ドイツ語の歌や山大学生歌、学生時代の懐かしい歌が飛び交った。伴奏はなくとも、心の内面にぐつとくる歌ばかり、最近の学生のコンパにはない光景。参加してくれた学生も、ドイツ語を学ぶことにプライドをくすぐられたはずだ。まさしく、独文生はロマンチスト。なにが、そうさせたのか、ドイツ語を学んだ故か、それとも、ロマンチストがドイツ語を学んだのか。それが謎だ。

二次会は各々が好きなものという事で、カフェでとなった。ビールを飲

む者、コーヒを飲む者、はたまた、カレーを食べる者。十一時を過ぎたが、別れが惜しかったのか、それとも、一次会での歌が若い人には物足りなかったのか、誰とはなしに(実を言つと、誘つたのは大恩師だった)カラオケでの三次会となった。これまで歌わなかった者のオンパレードとなったが、とりわけ、誘つた長老のワンマンショーという印象が強かった。私は、懐かしさも手伝つて、朝まで付き合つと約束したものの、四次会が終わると、おほつかない足どりで自宅へと逃げ帰つた。四時を回つていた。申し訳なかつたが、実は、鴻文会の懇親会と併せて、最後は五次会だった。予定通り、朝までというお方もあつたようだ。

今回も、鴻文会総会が終わつた夜の、「独文会」だった。恩師の先生三人、中野先生、渡辺先生、プロット先生、お忙しいところ、有り難うございました

、遠方の千葉や福岡・岡山・高松から馳せ参じた者を含め同窓生十八人、そして学生三人、大いに場が盛り上がり、普通では味わえない、実に愉しい集まりだった。準備はちよつと大変だけど、やはり、同窓会の良いところは、確かに随分とある。人生の郷愁か活力か。両方だろう。過去を見詰めることがあつてこそ、新たな活力も生まれるものだろう。この雰囲気味わうためにも、次回はずっと多くの同窓生が出席されることを望みたい。最後にしたが、今回の大盛会は、私と



(文理第十四回卒・独文学)

同期の成末和正氏と中村恭亮氏の、司会・会計他すべてにわたるお世話に因るところが大きい。両氏に、感謝申し上げます。(なお、現在空席となっている「独文会」の会長を、成末氏にお願いしたい。同窓生の了解を得る次第です。)

# 山口大学人文学部二ニュース

## 人文学部教育職員紹介

学部長(併) 田中誠二

人文学部  
人間学

高木智一	豊澤智	林脇文靖	アラム	柏木真	古庄真
教授	教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授	教授

歴史文化

橋田ニ	馬中川	滝野本	藤永隆	真藤隆
教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授

社会情報学

奥聖子	小谷典	中村友	辻正典	瀬川洋	湯川英	横田尚	高山征	山本真	藤川裕	村田一
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授

言語文化学  
国際コミュニケーション

添田建治郎	林伸三	岩部浩一	富田美波	太田正	下村佳	磯部雅	武部一	更科慎
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授

比較言語文化

岡光一	田中晋	伊豆大	平山三	井上芳	平野信	池田宏	宮原一	森野正	坂本千	尾崎佳
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授

言語情報学

霧野昭夫	本野尊	平野義	乾田行	和秀郎	島越郎
教授	教授	教授	教授	教授	教授
助教授	助教授	助教授	助教授	助教授	助教授
教授	教授	教授	教授	教授	教授

東アジア研究科(大学院)

根ヶ山泰	東アジア研究科(大学院)
教授	教授
助教授	助教授
教授	教授

平成十七年度

## 山口大学人文学部生涯学習事業

私たち山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、十七年度、次のような事業を行ってまいりました。

### (一) 第十八回公開講演

毎年一回、山口県下のひとつの地域において、本学部の二名の教員がひとつのメインテーマのもとに、三時間程度の講演会を行っています。今年度は、歴史のまち、萩市教育委員会のお世話になりました。

日時 平成十七年十一月五日(土) 午後一時三十分より

会場 萩市民館研修室

メインテーマ 教え、学び、わかること

講師・演題 脇條靖弘助教授

『アリストテレスにとっての知識、理解、学び』

林孝助教授

『「学半」とはどのようなことか?』

\* なお、来年度第十九回は、言語文化学科比較言語文化講座の担当で開催の予定です。

### (二) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)

五年目を迎えました、大学キャンパス内における公開講座(土曜大学)は、今年度も昨年どおり、前期三コース、後期三コースの、合計六コースを開講し、それぞれ四回ないし八回の講義を行い、百余名の聴講者がありました。土曜日の午後、社会人、大学生、高校生が共に楽しく学んでおります。

会場 山口大学人文学部教室

前期(五、六月)

異文化交流コース 岡光一浩教授 『大人が読むグリム』

日本文化コース 磯部佳宏助教授 『日本語の諸問題 「誤用」と

「ゆれ」を中心に』

外国語学習コース(英語) 伊豆大和教授 『アメリカ小説を英語で読む』

後期(十一月)

現代文化コース 藤永康政助教授 『現代アメリカ社会と歴史』  
やまぐち学コース 真木隆行助教授 『山口と吉敷郡に刻まれた中世史』  
外国語学習コース(中国語) 更科慎一講師 『中国語発音教室』

\* なお、来年度も同様の時期に開講の予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。(山口大学エクステンションセンター、電話083 933 5059・5150)

(三) 出前講義

人文学部は、幅広い年齢層の知的探求心に応えて、「必要ととき、いつでも学べる」場となることを目指して、本学部教員が気軽に大学の外に出向いて講義する「出前講義」を行っております。今年度も、山口県下や広島の高校等に出掛け、多くの講義を行ってまいります。

来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応えてまいります。教員の講義できる領域などを掲載したパンフがありますので、お気軽にお申し出ください。(山口大学エクステンションセンター、電話083 933 5059・5150)

(四) 周南サテライトカレッジ

周南市や県下の高等教育機関と連携して、徳山駅ヒル市民交流センターで、今年度七月曜日に、本学部教員による大学レベルの連続講義を行いました。

(五) 七月、八月 『世界の都市と文化』

池園宏助教授/乾秀行助教授/岡光一浩教授/平山豊教授

\* なお、来年度も開講を予定しております。周南市の発行する募集要項をご覧ください。

(五) 周南オープンカレッジ

周南市教育委員会(生涯学習センター)主催の生涯学習講座です。今年度も本学部教員による講座を開講しました。

(八月、四回) アラム・ジユマリ Alan Djumali 助教授

『日本とインドネシアで宗教について「学ぶ」「教える」「理解する』

\* なお、来年度も開講を予定しております。周南市の発行する募集要項をご覧ください。

鴻文会「賛助会員」の制度に  
各位のご協力をお願い致します

鴻文会活動は、実質、毎年度入学される新入生がご入金下さる「終身会費」(一万円)、合計約一九〇万円をもとに行われております。

鴻文会は、この二四年の間、同窓会総会の開催、人文学部や日中学术交流奨励会への種々の支援、名簿管理、会報発行などの活動を行ってまいり、近年はこれに、山口大学教育研究後援財団への支援、ホームページの管理などが加わって、活動が多様化しております。しかし、これらの活動を支えていく資金は、昨今の厳しい経済事情もあって、決して安心できる状態ではありませんでした。

そのような中であって、お陰をもちまして、ここ三年間卒業生会員の皆様から多額のご厚志をいただき、第七回総会はじめ、本年度開催の諸活動の資金に当てることができました。ひとえに皆様のお力添えのためものでございます。

活動を支えてくださった各位のお名前を左に記して、御礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員について、引き続きお力添えをたまわれますようお願い申し上げます。加入者名「鴻文会」(郵便振替口座01500 4 15902)と記した振替用紙を同封いたしております。それをお使いいただ

て、何卒、一口千円(なるべく二口以上)のご寄付を、よろしくお願いいたします。

平成一六年度賛助会員

(順不同、敬称略)

- 永松禎次、利重迪子、松浦 学、沖中武志、青木 寛、池本博泰、野村悦子、松本 肇、桐原恵子、武田伊都子、松川博一、林 協三、武谷 実、窪田淑子、榎本美由紀、武田伊勢雄、岩熊 寛、奥田和子、前原洋子、平本真悟、河口 正、小川朝子、砂田茂子、古森繁樹、吉田徹夫、久保田千代子、中村恭亮、藤原秀晴、渡辺茂之、八田順子、渡辺 博、中垣八朗、大串明子、島田麻希子、田村美佳子、鈴木百合夫、萩原正之、藤田和彦、村上秀夫、梶 真澄、神足 章、上村作郎、竹内 剛、小池美佐子、満江寛俊、藤永公然、石丸一政、山本利博、椎野由紀子、岩尾より子、白部文子、河野隆史、松崎公彦、生野龍二、権代鉄也、権代良子、野村教子、菊谷 進、田中 伸、倉重雅子、平田昌司、山本博信、添田建治郎、金山嘉代子、石井 勇、立川和正、宮藤隆夫、青木亜希子、馬場昌之、藤澤敏行、手島文恵、殿河内恭子、戸谷美代子、林道子

# 研究室紹介

## ◎日本語文化論コース

日本語文化論コースは、旧小講座の国語学・国文学の両講座がそのまま母胎となっており、日本語学・日本文学を専門科目として取り扱っています。この数年の間に所属教員にはかなりの異動がありました。関一雄先生、石井大先生が定年退官なさるとともに、大学改組に伴い、旧教養部から移籍された飯倉洋一教授、石川巧助教授は、それぞれ大阪大学、九州大学に転出されました。現在のスタッフは、日本語学担当が、日本語音韻論の添田建治郎教授、日本語教育の林伸一教授、文法史・語彙史の磯部佳宏助教授、日本文学担当が、近・現代文学の平野芳信教授、中古文学の森野正弘助教授、近世日本文学の尾崎千佳助教授の計6名です。とくに4年前に若い森野、尾崎の両助教授を迎え、スタッフの平均年齢もぐんと若返り、ますますコース内に活気が出てきたように思います。

一方で、一昨年に石井大先生、昨年は水本精一郎先生と、相次いで旧師を喪つたという、実に残念で悲しい出来事がありました。両先生には、まだまだそのご活躍が期待され、学外から当コースを見守つてもいただきたいご存在でした。

ところで、当コースの教員、卒業生、在学生在が主たる会員となり運営している「山口大学人文学部国語国文学会」が、

今年創立30周年を迎え、5月に記念大会を盛大に開催しました。卒業生、在生による意欲的な研究発表が繰り広げられるとともに、関先生による記念講演が行われ、多くの会員が集まりました。前述のように、お二人の旧師を喪つてしまつたなか、関先生が現役の研究者・教育者として下関の梅光学院大学でご活躍なさっているのは、まことに心強い限りです。

大学は、昨年独法化され、予算が激減するなど、今後の研究・教育環境は予断を許さない状況です。また、18歳人口の減少に伴い、大学自体の先行きも不透明な現状です。しかし、当コースは、一学年30名の定員に対して、毎年それをはるかに越える学生が進級を希望し、また、毎日夜遅くまで研究室にこもつて、演習・講読の発表の準備に余念がない学生たちの姿を見ていると、当コースの研究・教育の将来はまだ希望が持てるという気がしてきます。以前と比べると、卒業後に就職に就く学生は激減しましたが、それでも一時非常に厳しかった就職状況は、景気回復にもよるのか、この一、二年随分好転しているように思われます。

また、当コースには、人文学部が交流協定を結んでいる、中国の山東大学、韓国の仁荷大学から、毎年、交換留学生がやって来ているとともに、最近では、大学院の方に県内の現役の高校の教員が相次いで入学しているなど、今後、ますます、国際交流や生涯教育の分野においても貢献が期待されているところです。

(コース委員 磯部佳宏助教授)

## 坂本貴志助教授

### 「日本ゲーテ賞」を受賞



坂本氏は、比較言語文化講座の助教授。二〇〇四年六月四日、日本大学文学学部百周年記念館における社団法人日本ゲーテ協会総会において、栄えある「日本ゲーテ賞」を受賞されました。ここに、氏に取材した結果を要約してご紹介いたします。

同協会は昭和6年に創設の学術団体で、ドイツ文学と文化の研究・紹介を目的として活動している。研究論集「ゲーテ年鑑」を刊行、「ゲーテ生誕のタベ」等の文化シンポジウムを開催している。「ゲーテ賞」は、「日本におけるドイツ文学・ドイツ文化の研究および理解の促進」のために、毎年、四五歳以下の研究者から懸賞論文を募集し、その中から選ばれた極めて優秀な論文に授けられる。「該当者なし」の年が多いとも聞く。

氏の受賞論文『ヴァレンシユタインの崇高』は、18世紀ドイツの劇作家フリードリヒ・シラー（ペーターヴェン、第九の歌詞の作者です）の三部作悲劇『ヴァレンシユタイン』（1800年、岩波文庫所収）を、美学概念の「崇高」を鍵にして論じたもの。古代ギリシア悲劇においては、悲劇芸術と共同体とが根源的に関わるといふ視点が成り立つが、そこでは、人という生け贄が象徴的に神に捧げられることで共同体は活性化し、人々はより緊密に結び合わされる。一方で、フランス革命を背景に持つヨーロッパ社会の転換期に、本作品を含めて新しく悲劇が大量に生産されたという事実からは、悲劇芸術が、新しく生まれつつあった市民社会における人間存在について、崇高なる理想を提示し、この方向へと人々を糾合し、かつ変革していく役割を担っていたであろうとの予想が成り立つ。受賞論文は、この理論的予想をシラーの作品において検証したものである。

坂本氏は、「本論考が表彰されたことは、卓越した文学者を目指すようにとの叱咤激励を頂いたものであると、いまだ大いに未熟なる文学者である私は理解しています。」と謙遜しておられた。研究の今後一層の進展が期待される。

## 島越郎助教

## 日本英語学会で受賞

左は、島先生（言語情報学講座）に無理を申し上げてお寄せ願った紹介文です。

おふくろ様  
師走に入り日増しに寒くなりますが、元気で過ごしていることと思います。さて、筆無精な僕がこうしてあなたに手紙を書いていることを妙に思われるかもしれませんが、一寸ばかり嬉しいことがあったので、筆を執ることにしました。

実は、日本英語学会新人賞に投稿していた論文が佳作に選定され、先月11月12日に九州大学で開催された第23回日本英語学会の総会で表彰されたのです。この賞は、日本英語学会が、若手研究者の育成と研究活動の促進を目的とし、学会20周年を記念して2003年に設定した賞であり、今年度が3回目になります。過去2回において新人賞と佳作に選ばれた研究は無く、今年度初めて僕の書いた論文が佳作研究に選ばれました。（尚、新人賞は未だに出ておりません。）論文名はReducing Pseudogapping to VP ellipsisで、英語の省略構文に関する研究です。

1999年の秋に僕が山口大学人文学部に赴任する際、小学校の教員を40年近く勤めたあなたは、「私は研究者の世界は知らないけど、きつと、よい研究

者というのは、よい教育者でもあるはず。

これからは、学生に教えることで、自分の研究も深めなさい」と言ってくれたのに、青二才の僕は、「大学のことなど何も知らないくせに、よく言うよ。研究と教育は全く別物」と生意気に言い返しましたよね。恥ずかしい限りです。あれから6年経った今、ようやくあなたの言葉の真意がおほるげに分かりかけてきたような気がします。でも、よい教育者であり、また、よい研究者でもあることはとても難しく、これからの道のりはまだまだ長いと痛感しています。今回書いた論文が新人賞受賞ではなく佳作だったのは、おそらく今の自分には何かが足りなかったのであり、その足りない何かを埋めなさいという「宿題」を戴いたような気がします。これからは、学生と共にその宿題を完成できるよう一層頑張りま

す。  
これからしばらく寒い日が続きますが、くれぐれもご自愛ください。それは、また。

島越郎

## 新任教員の挨拶

よろしくお願いいたします

古庄真敬

今年度から人文学部人間学講座にて倫理学を担当させていただくことになりました古庄（ふるしょう）と申します。専門は、西洋近現代の哲学・倫理思想で、これまで、とりわけハイデガー哲学を中心に研究してまいりました。

山口大学には、既に三年前より工学部の教員としてお世話になっていたのですが、このたび人文学部に転属させていただきます。格段に恵まれた環境のなかで本来の専門領域を教育、研究できるようになり、本当に嬉しく思っております。私事で恐縮ですが、一歳半になった長女も、山口市の自然を日々満喫しながら、このたびの環境変化を全身で喜んでいるように見受けられ、これも、本当に嬉しく思っている次第です。とはいえ他面、私としては、「豊かな自然に恵まれた住みよいところ」といったお目出度い表現からはこぼれ落ちざるをえない山口県の良きも悪きも多様な側面を、ここ数年のあいだ、多少なりとも身をもって見聞したような気がしております。我が身の上になじったこのたびの好転をただ喜んでばかりいて良いのだろうか、と不安の念がよぎるのも、正直なところです。

さて話題は変わりますが、私の学問上

の関心についても、少々お話させていたたくことをお許しください。私の関心があるのは、あえて御大層な美辞麗句を弄するならば、いわゆる「人間たちの絆」の本質といった事柄です。それで、この世界の成り立ちの基底にある根源的な「対話」としての「言語」の生起というような事柄を語るハイデガーの思想について魅せられて、そこに私なりの「絆」への思いを重ねつつ、一応の学問的論文を書き継いで現在に至ることともなつたのですが、しかしながら最近、ある危機的な疑念が、旧来の自分の哲学的関心の根幹を浸しつつあるのを否定できぬようになりまして。

それは、自分がこれまで暗黙裏に前提していた人間たちの「相互了解」などといった概念は、自分自身が巻き込まれているこの歴史状況の展開のなかで、やがて完全に空虚な空文句と化していくのではないか、という思いです。たとえば「改革」を呼号するだけの空疎な政治（グローバルな経済システムの拡大再生産プロセスの記号的表現）に巻き込まれるなかから生じる救いようのない相互不信やニヒリズムは、やがて私たちを、「自己自身および他者たちが今、何を何

のために為しつづけるのか、互いに全く分らない。あるいは、無関心である。というような状態 (animal labors の相互無関心・没了解) へと導くことになるのではないか。そんな気がして、自分のこれまでの学問研究をひそかに支えてきた美辞麗句の空々しさに慄然とするのです。

## 御退任教員の挨拶

「思い出すことなど」

しかし、いたずらな反動あるいは敗北主義に退行することなく、新たな (あるいは古い) 「絆」の種をたずねて、山口大学の再出発を期そうと思つて居る次第です。どうかよろしくご交誼を賜りませう、お願い申し上げます。

(人間学講座・助教授)

伊豆大和

昭和四五年の春、山口大学教養部の英語教員として赴任してからおよそ三十五年の歳月が経過している。光陰矢の如し。今更ながら時間の流れを思い知る。この間、平凡な教員として勤務してきた私にも忘れられないいくつかの「事件」がある。

まずは着任したばかりの新米教員として経験した「大学紛争」である。都市部の大学ではほぼ終息しかかっていた「紛争」が、山口大学ではいまだ最盛期にあった。「反体制」を唱え、「自己批判」を教員に迫る学生たちのエネルギーは、現在のおとなしい学生からは想像さえできない。タオルで顔を包み、ヘルメットにガバ棒を持って授業を潰し、「大衆団交」で教員を一人ひとり吊し上げた当時の「活動家」学生たちには、腹も立つたが

共感できる部分もあった。少なくとも彼らは、目先の自分のことしか念頭にない今日の多くの学生たちよりも、日本という国の在り方や一人の人間としての生き方をより真剣に考えていたように思える。何年も留年し、やがて姿が見えなくなった彼らは、その後どんな人生を送っているのだろうか。

「紛争」が終焉し、「平和」が訪れたと思つていたら、もう一つの「事件」が教養部内部から発生した。卒業生を持たず、専門科目を担当できない教養部教員共通の不満から生じた「教養部学部化」問題である。これには様々な利害が絡み合い、その後長く燻り続け、ややもすると人間関係に軋みを生じかねない局面もあつたように思う。平成八年、この問題は皮肉にも「教養部解体」・「教養部教

員の学部分属」という形で決着がついてしまった。同僚のなかには、教養部が無くなったら自分はどつなるのか、解雇されるのか、と深刻に悩んでいる人もいた。程度の差こそあれ、当時の教養部教員の誰もが漠とした不安に支配されていたことは間違いない。私が属していた英語科の十六名の教員のほとんどは無理を承知で人文学部への分属を希望していたと思う。結果的には、四名ずつ四学部に分属となり、自分の希望しない学部に行かざるをえないという辛い思いをした人が多い。幸いにも、私は人文学部に分属され、温かく仲間に加えていただいた。本当に幸運だったと感謝している。かくして、教養部の英語教員から人文学部の英米文学担当教員となり、研究と教育の一体化を見たのであるが、文学の講義をするこの困難さと戸惑いはいまだに消えない。

最後の「事件」は国立大学の「独立行

## 未だ普請中

三月、定年を迎える。最近、これまでの業績を出せとか、これまでを振り返って文章を書けとか、あちこちで言われる。しかし、書くことと思つてもなにも書けぬ。飽きもせず、と言つたが、未だ、大学人として責任を果たすべく教育と研究にあくせくしている身には、十月に、過去を振

「政法人化」であり、多様に導入される「評価システム」である。還暦を越え、老教員となった私には、教育の場に競争原理がはたらき、生き残りをかけての模索が国立大学の中心課題となることに對する違和感をどうにも拭い去ることができない。今後、大学はどうなるのであるか。若い人たちの奮闘に委ねるばかりである。

全くの個人的理由で、定年まで二年を残し、今年度限りで退職 (辞職) させていただくことになった。研究、教育、大学運営のいずれにおいても、これといった業績のない平々凡々たる教員であつたことはよく自覚している。特に良いことは何もしなかつたが、しかし特に悪いこともしていないつもりである。なんとか無事にこの職を終えられそうなのも、支えていただいた多くの教職員、学生諸君のお陰と感謝している。

(比較言語文化講座・教授)

岡光一 浩

り返ることも未来を思い描くことも困難だ。なんと言つても四十年の大学人生活だから、簡単にはそこから抜け出て、過去も未来も見詰められない。簡単に文章に総括するなんて無理難題だ。でも、責任を果たすだけでも振り返らざるを得ない。しかしそうするとまた、愕然とす



る。四十年の大学人生活のなかで、自分はいったいなにをしてきたのか、と自問するしかない。確かに、真剣に教育してきたとは思いつし、大学の仕事も普通にはしてきた。研究にも精を出して論文も割にたくさん書きはした。しかし、なにもかも中途半端な感否めない。能力不足を痛感する。大学を辞めるこの際、思い切つて、研究も止めるとあちこち言い触らしている。身体のためにも経済的にも、その方がよい。研究というのはなにより体力を使う。目も悪くなるし肩も凝る。非日常のエルミタージュ生活よりは、阪神タイガースの追っかけの方がすべてにわたつて良いのは分りきつていゝる。過去を消極的にしか見詰めないで、自分を慰めようとしている可笑しい自分が、今、ここにゐる。

一九六六年三月、山大理文学部を卒業し、二年間広島大学文学部大学院に在籍その後、北海道教育大学と北海道文学部に八年間勤務、母校を卒業して十年後の一九七六年四月に母校に帰らせていただいた。もう三十年。ちょっと振り返つて見るだけでは、言葉にはならぬほどいろいろいることがあつた歳月、定年後に過去をしっかりと検証するとして、ほぼ四十年間の研究者生活をとおして、今、専門的に少し言えることは、メランコリーから発するドイツの内面性 *innerlichkeit* がいくらか分つたということか。ドイツの優れた作家や芸術家のように、このメランコリーをいかに形象化し客体化して、その呪縛から逃れ内的自由を獲得するか、これがこれからの私自

身の課題となる。振り返ることよりは、「夢の半ば」と「永遠の夏休み」をどう生きるかの漠然とした思いの方が断然強い昨今ではあるが、少なくとも今、私の心の中ではつきりと言へることは、私の精神的生を培つたのは山大だ、山大は私の人生そのものだ、皆さん、ありがとう、という言葉であることに間違ひはない。万感を込めて、皆さんに感謝申し上げます。

(比較言語文化講座・教授)

### 岡光一浩教授 最終講義のお知らせ

日時 平成18年2月4日(土) 午後2時  
場所 山口大学人文学部小講義室  
演題 「ドイツ的と、文学と」

詳細は、山口大学人文学部独仏語文化論コースのホームページ (<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/deutsch/>) をご覧下さい。  
なお、同窓の諸兄姉には、別途ご案内を差し上げます。  
お問い合わせは、  
人文学部下寄研究室 (shimoz@yamaguchi-u.ac.jp) まで。

### 平成十六年度 人文学部卒業生・ 大学院修了生進路状況

#### 人文社会学科

建設業  
(株)アットハウジングA2、タマホーム(株)  
製造業  
伊津美屋(株)廣栄堂、まるもや刺繍(株)マルニ、アロー印刷(株)カクダイ(株)ワイテック

情報通信業  
(株)光通信、山口システム開発(株)

運輸業  
福山通運(株)近鉄エキスプレス  
卸売・小売業  
(株)フタバ図書(株)岡藤商事、TAY2、ざつか屋(株)上昇、マツクスバリュウ九州(株)(株)大庄、日立ハウステック

金融・保険業  
広島信用金庫(株)クレディセゾン  
不動産業  
宇部商事(株)

飲食店・宿泊業  
サンデーサン(株)関門海  
医療・福祉  
(株)日本サプライヤー

教育・学習支援  
(株)アタックコーポレーション、尚学社

卸売・小売業  
(株)ナカタ薬品、サキヤクリエイト

複合サービス事業  
JA福岡豊築

サービス業  
山口大学附属図書館、くらしき作陽大学(株)丸三TLCグループ(株)メノガイア、防長トラベル(株)丸三TLCグループ、たけうちグループ

公務員  
山口県庁、山口県臨時、六日市町役場、鹿児島県警、北九州大学職員、福岡県警、小林市市役所

進学  
大阪大学大学院文学研究科、九州大学大学院文学研究科、海外留学、専門福岡国際医療学院、山口大学大学院経済学研究科

計6名

#### 言語文化学科

建設業  
タマホーム(株)

製造業  
雲海酒造(株)、松月堂製パン(株)、寿製菓(株)(株)中央フーズ(株)インターフーズ(株)ハンシン(株)ピート・ソニック、ホンダ技研(株)ウツドワン

情報通信業  
(株)オンテック、宇部情報システムソフトバンク(株)ネクシズ

運輸業  
(株)ムロオ

卸売・小売業  
(株)ナカタ薬品、サキヤクリエイト

# 入学年度別学生数

(平成17年11月1日現在)

学部	学科・専攻	性別	17	16	15	14	13	12	11	10	計
			人文社会科学	男	50	41	40	35	9	3	
文学部	人文社会科学	女	57	62	59	65	2	1	0	0	246
		計	107	103	99	100	11	4	2	4	430
	言語文化科	男	17	16	20	20	4	1	2	1	81
		女	77	77	77	75	9	1	1	0	317
	合計	男	67	57	60	55	13	4	4	5	265
		女	134	139	136	140	11	2	1	0	563
人文科学研究科	地域文化攻	男	6	6	0						12
		女	6	4	0						10
	言語文化攻	男	2	1	1						4
		女	6	7	0						13
	合計	男	8	7	1						16
		女	12	11	0						23
合計	男	20	18	1						39	

川島モーターズ、アスカ(株)、(株)ニッセン、自営業(株)コメリ、セガミメディックス(株)  
 金融・保険業  
 西京銀行、伊予銀行、(株)しんわ、日本生命保険相互会社  
 飲食店・宿泊業  
 ジョイフル、ロイヤルコーポレイション(株)、大和美業  
 医療・福祉  
 小郡第一病院  
 教育・学習支援  
 島根県教員、くらしき作陽大学、山口県立安下庄高校講師、山口県高校非常勤講師、山口県立徳山商業高校講師、福岡県中学校非常勤講師、長崎県高校

教員、萩光塩学院、(株)オール5、ELEBEC教育図書センター、(株)NOVA  
 サービスマネジメント  
 九州大学ユーザサイエンス機構、山口県国民健康保険団体連合会、厚東川工業用水道事務所、ブレイン(株)、東亜外業(株)、NTT西日本、郵船トラベル(株)、三和興産(株)、(株)日本セレモニー、山田屋、HIS、(株)サニックス、(株)アクティオ  
 公務員  
 防府市立図書館嘱託職員  
 進学  
 山口大学大学院人文科学研究科、山口大学大学院人文科学研究科、広島大学

## 人文科学研究科

大学院教育学研究科、愛媛十全医療学院、海外留学、専門学校 計8名  
 地域文化専攻  
 山口県臨時職員、山口大学大学院東ア

同封の「異動通知カード」で会報送付先をお知らせ下さい。

## 編集後記

鴻文会報「鴻文」第二十五号が出来上がりました。何とか年度の早いうちに仕上げたいと思いましたが、やはり十二月には間に合いませんでした。ただ、新年早々一月中にはお届け出来そうです。昨年、八月二十日に第七回の鴻文会総会を無事「盛大」に開催することができました。このことを、皆様とともに慶びたいと思います。留任なさった大野会長、立川副会長、本田副会長はじめ、新役員の皆様、四年間、重いご負担をお掛けいたしますが、どうかよろしくお願いいたします。

「暇が人を作る」時代は終わったのかも知れません。「人智の里」、人文学部蔵  
 ジア研究科、山口大学教育学部研究生  
 山口市史編纂室、山口市歴史民俗資料館臨時職員  
 言語文化専攻  
 山口大学大学院東アジア研究科、山口県教員

大学が法人化して一番変わったことと言えは、とにかく忙しくなったということです。それはもう、「朝の出勤の準備が一日中続いている」ような気ぜわしさです。「暇が人を作る」時代は終わったのかも知れません。「人智の里」、人文学部の蔵